

中学生の防犯意識や危険行動に関する現状 —在日ブラジル人中学生と日本人中学生の比較を踏まえて—

木 宮 敬 信

The Present Conditions Related to Security Consciousness and
Dangerous Behaviour of Junior High Students
～ Based on the Comparison between Brazilian Junior High School
Students Residing in Japan and Japanese Junior High Students ～

Takanobu KIMIYA

2016年11月16日受理

抄 録

コミュニティサイトに起因する未成年者の犯罪被害の増加、定住外国人の増加に伴う外国人犯罪の問題など、近年の犯罪状況は新たな側面を迎えているとも言え、これらに即した防犯教育プログラムの開発が求められている。そこで、本研究は日本人中学生と在日外国人中学生の防犯意識や危険行動を調査し、新たな教育プログラムの開発に必要な知見を得ることを目的に実施された。平成28年に行った調査の結果、防犯意識の高いグループと既存の教育プログラムの届きにくい防犯意識の低いグループに2極化している実態や、インターネットの利用に関する危険因子の存在について理解することができた。今後は、これらを踏まえた新たな教育プログラムの開発が期待されるのではないだろうか。

キーワード：防犯意識、危険行動、中学生、在日ブラジル人、教育プログラム

1. はじめに

平成14年をピークとして、認知刑法犯件数は年々減少し続けている。しかし、全体の犯罪件数が減少する中、未成年者が被害者となる犯罪の減少率は低く、全被害件数における未成年者の被害件数割合は上昇傾向にある¹⁾。未成年者が被害者となる犯罪は、本人や家族の心身に深い傷を残すとともに、社会に及ぼす影響も大変大きく、市民の体感治安を悪化させる要因となっている。市民の防犯意識が高まる一方で、近年の未成年者が被害者となる事件には、被害者自らが危険に近づくような行動を取っているケースも少なくない。スマートフォンの普及により、多くの未成年者がSNSを利用し、知らない人とのメールやメッセージのやり取りを日常的に行っている。こ

のような状況の下、悪意を持った大人が未成年者に容易にコンタクトすることができるようになり犯罪に結びついている。警察庁の資料によれば、コミュニティサイト等に起因する未成年被害者は、平成 20 年以降増加傾向が継続しており、平成 28 年上半年期は過去最高の被害者数となっている²⁾。また、こうしたインターネットを利用した犯罪については、年々新たなネットワークサービスが開発されることもあって、既存の教材や教育内容では対応できないことも多くある。したがって、最新のネットワークサービスの注意点等について教育するとともに、子どもたち自身が危険に気づき、対応できる能力を育成する必要性が強く求められている。従来行われてきた防犯教育は、犯罪場面での対応が中心であり、犯罪から自らを遠ざけていくという視点は十分に盛り込まれているとは言い難い。つまり、自らの行動を変容させ、危機場面に遭遇させない教育の検討が課題といえる。

こうした未成年者が被害者となる犯罪に加えて、最近の問題は在日外国人による犯罪である。来日外国人による犯罪はピーク時の平成 16 年、17 年に比べて大幅に減少しているが、ここ数年は横ばい状態が続いている³⁾。ヒット&アウェイ型の犯罪（犯罪を目的に来日し、犯罪後に出国すること）ではなく、日本に長期で滞在している外国人やその 2 世、3 世による犯罪も近年の検討課題である。在日外国人の子ども達は、将来の帰国を念頭に外国人学校へ通う者や金銭的な理由等により日本人と一緒に公立学校に通う者と様々であるが、防犯教育や非行予防教育については、特に在日外国人学校において十分に行われていない現状も指摘されている⁴⁾。また、過去の在日外国人学校の小学生を対象とした調査では、日本に住んでいるにも関わらず、日本人が当然知っている防犯上の基礎知識への理解が不足している児童生徒が多くいることが明らかとなっている⁵⁾。

2. 研究目的

本研究は、前述した在日外国人学校の中学生の現状を踏まえ、彼らを対象とした防犯および非行予防を目的とした新たな教育プログラムの開発に向けた基礎資料を得ることにある。そのための第一段階として、現在の日本人中学生の行動や安全意識の傾向を把握する必要がある。また、同時に在日外国人中学生の行動や安全意識の傾向を把握し、それらを比較することで効果的な教育プログラムの検討を行う予定である。在日外国人児童生徒を対象とする調査では、小学生対象の調査は過去に行われているが、インターネットの普及に伴う新たな犯罪被害に対応した中学生を対象としたものは見当たらない。平成 23 年に行われたブラジル国内での調査研究では、薬物が非行の入り口となっていることから、薬物乱用教育を在日ブラジル人児童生徒にも充実させていくことが重要との結論に至った⁶⁾。しかし、その後のインターネットおよびスマートフォンの普及により、非行への入り口が広がってきている。コミュニティサイトの利用といった日常の行為の中に犯罪被害への入り口が存在するようになり、これが自らの非行行為につながっていくことが指摘されている。このような現状を踏まえ、新たな効果的な教育プログラムの開発が求められており、本研究成果がこの基礎資料

として有効に活用されるものと考えている。

3. 研究方法

平成 28 年 6 月に、静岡県内の公立中学校 1 年生 99 名（男子 48 名、女子 51 名）を対象に質問紙調査を実施した。調査は学校の協力のもと、担任教師の指示により無記名で実施され、その場で回収された。質問項目は、安全意識や行動に関する 19 項目であり、すべて 2 択もしくは 3 択の選択回答式となっている。質問項目の詳細については表 1 に示すとおりである。また、この結果と、平成 28 年 3 月に同県内の在日外国人学校に在籍するブラジル人中学生 12 名（男子 7 名、女子 5 名、平均年齢 12.7 歳）に対して実施した同内容の質問紙調査の結果を比較し検討を行った。ブラジル人中学生を対象とした調査は、ポルトガル語に翻訳された質問紙を使用し、教室で教師の指示のもとで実施された。なお、データの集計と解析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics 22.0 for Windows を使用した。

4. 結果と考察

4-1 日本人中学生の安全意識や行動傾向

質問項目ごとの全体および男女別傾向は表 1 に示すような結果となった。「家族と防犯について話すことがあるか」という項目については、はいと回答した割合が 58.2%であった。また、「家の外で危険を感じた時に逃げ込む場所を知っているか」という項目については、はいと回答した割合が 73.7%であった。これらの数値は、平成 21 年に実施した同内容の調査結果と比較して大きな差は認められない⁷⁾。家庭内への防犯活動の働きかけや「こども 110 番の家」等の認知といった基本的防犯教育が十分に進んでいないことがうかがえる結果である。「知らない人に声をかけられて怖いと思ったことはあるか」という項目については、28.3%がはいと回答していた。この割合は、過去の調査との比較でも大変高い数値となっている⁷⁾。平成 18 年に兵庫県神戸市で実施された同様の調査では、被害経験率は 15.3%であった⁸⁾。また、その他の調査においても、約 1 割の児童生徒に声掛け等の被害経験があるとされている⁹⁾。一般に学区内に「ショッピングセンター」「飲食店街」「風俗営業店」がある地域では、声掛け経験が多くなる傾向があるが、今回調査を行った中学校は住宅地域にある学校であり、こうした地域で約 3 割の生徒に声掛け経験があるというのは注目に値する結果である。児童生徒を取り巻く環境が急速に悪化しているのか、何らかの他の要因が影響しているのか、今後さらなる検討が必要である。「夜 8 時より遅くに一人で外にいることはあるか」という項目については、16.2%がはいと回答している。この数値は、全国的傾向と比較すると低い数値であり、地域（学区）の特性を表しているものと考えられる。また、「携帯電話（スマートフォン）の所持」については、50.5%が自分の端末を所持していると回答している。平成 28 年の調査では、中学生の 60.9%が自分の携帯電話もしくはスマートフォンを所持していることが明らかとなった¹⁰⁾。中学生の携帯端末の所持については、塾や習い事で帰りが遅くなったりすることへの対

応が最大の理由とされている。この調査結果と大きな差は認められていないが、所持率が下回っていることは、夜間外出が少ない地域（学区）の特性を表しているものと考えられる。インターネットの利用については、SNSを利用している人が18.2%おり、知らない人とメールなどのやり取りをしている人が9.2%であった。知らない人とのやり取りは犯罪被害の入り口になることは容易に想像できるため、防犯教育の徹底が強く求められる結果となった。また、オンラインゲームについては50.0%の生徒は経験していた。オンラインゲームにはメッセージのやり取りができる機能など、知らない人との出会いのきっかけとなるものも多く含まれるので注意が必要である。

防犯ブザーやホイッスルについては29.6%が所持していると回答している。2015年に行われた調査では、小学校6年生の所持率が23.0%であった⁹⁾。一般に年齢が上がると防犯ブザー等の所持率は低下するため、調査対象者の防犯意識の高さがうかがえる結果といえる。家に一人でいる時に誰か訪ねてきて怖いと思った経験については、16.2%がはいと回答している。一定数の生徒が留守番時に怖い体験をしていることが明らかとなり、身近な危険の存在について十分に教育する必要性が感じられた。喫煙や飲酒の経験については、ほとんどの生徒が未経験であった。また、喫煙や飲酒をしている友人の存在についても、ほとんど認められなかった。初期非行行動と考えられる落書き経験についても、ほとんど認められなかった。誰も住んでいない家や壊れた建物を見つけた時どうするかについては、10.3%が覗いてみたくなると回答していた。また、落書きがある場所を見つけた時どうするかについては、何も思わないと回答した生徒は49.5%であった。また、楽しそうな気がするとう回答した生徒も5.2%いた。こうした場所は防犯上の危険個所と認識されるので、立ち寄らないのが原則である。しかし、小学校高学年あたりから、こうした場所に立ち寄りたいたいという好奇心や冒険心が芽生えると言われている。したがって、この年代以降は、単に立ち寄りを禁止するだけではなく、自ら身近な危険について学び、自分で考えて行動するような教育プログラムが必要と考えられる。

知らない人から声をかけられたときの対応については、話を聞いてみると回答した生徒が37.1%であった。一般には知らない人からの声掛けに対しては無視すると教えられている。しかし一方で、知らない人であっても困っている人に親切にしてあげることは大切だとの教えもある。この両立は大変難しく、児童生徒が状況に応じて自分で判断することが求められている。都市部では前者が重視され、地方では後者が重視されると言われることが多いが、今回の結果は地域（学区）の状況をよく表しているものを推測できる。盗みや喫煙をしている友達への対応については、性差が認められた。両項目ともに、注意する生徒は男子が女子に比べて有意に多く、また親や先生に伝える生徒は女子が男子に比べて有意に多かった。この結果は、男子は直接的なアプローチを好むのに対し、女子は間接的なアプローチを好む傾向があることを示している。したがって、とりわけ女子生徒に関しては親や先生とよいコミュニケーションが取れるよう配慮することが必要であろう。

以上の結果から、調査対象者の安全に関する行動と意識傾向が以下のようにまとめ

られる。

- ・知らない人からの声掛けで怖いと感じた経験が 28.3% と高い数値を示している
- ・夜間に一人で外出する機会は比較的少ない
- ・知らない人とメール等のやり取りをしている人が約 1 割いる
- ・防犯ブザーやホイッスルの所持率は比較的高い
- ・知らない人からの声掛けについては、37.1% が話を聞いてみると回答している

表 1. 日本人中学生の行動や安全意識に関する全体傾向

質問項目	回答選択肢	全体	男子	女子
家族と防犯について話をすることがありますか	はい	57名 (58.2%)	27名 (56.3%)	30名 (60.0%)
	いいえ	41名 (41.8%)	21名 (43.8%)	20名 (40.0%)
家の外で危険を感じた時に逃げ込む場所を知っていますか	はい	73名 (73.7%)	33名 (68.8%)	40名 (78.4%)
	いいえ	26名 (26.3%)	15名 (31.3%)	11名 (21.6%)
知らない人に声をかけられて怖いと思ったことはありますか	はい	28名 (28.3%)	10名 (20.8%)	18名 (35.3%)
	いいえ	71名 (71.7%)	38名 (79.2%)	33名 (64.7%)
夜8時よりも遅くに一人で外にいることはありますか	はい	16名 (16.2%)	11名 (22.9%)	5名 (9.8%)
	いいえ	83名 (83.8%)	37名 (77.1%)	46名 (90.2%)
自分の携帯電話（スマートフォン）を持っていますか	はい	50名 (50.5%)	20名 (41.7%)	30名 (58.8%)
	いいえ	49名 (49.5%)	28名 (58.3%)	21名 (41.2%)
ツイッターやFacebookなどのSNSを使っていますか	はい	18名 (18.2%)	8名 (16.7%)	10名 (19.6%)
	いいえ	81名 (81.8%)	40名 (83.3%)	41名 (80.4%)
知らない人とメールなどのやり取りをすることはありますか	はい	9名 (9.2%)	4名 (8.3%)	5名 (10.0%)
	いいえ	89名 (89.8%)	44名 (91.7%)	45名 (90.0%)
オンラインゲームをしていますか	はい	50名 (51.0%)	28名 (59.6%)	22名 (43.1%)
	いいえ	48名 (49.0%)	19名 (40.4%)	29名 (56.9%)
防犯ブザーやホイッスルなどを持っていますか	はい	29名 (29.6%)	13名 (27.1%)	16名 (32.0%)
	いいえ	69名 (70.4%)	35名 (72.9%)	34名 (68.0%)

中学生の防犯意識や危険行動に関する現状

家に一人でいる時に、誰かたずねてきて怖いと思ったことはありますか	はい	16名 (16.2%)	7名 (14.6%)	9名 (17.6%)
	いいえ	83名 (83.8%)	41名 (85.4%)	42名 (82.4%)
タバコを喫ったことはありますか	はい	1名 (1.0%)	0名 (0%)	1名 (2.0%)
	いいえ	98名 (99.0%)	48名 (100%)	50名 (98.0%)
お酒を飲んだことはありますか	はい	3名 (3.1%)	1名 (2.1%)	2名 (4.0%)
	いいえ	94名 (96.9%)	46名 (97.9%)	48名 (96.0%)
タバコを喫ったりお酒を飲んでいる友達を見たことはありますか	はい	2名 (2.1%)	1名 (2.1%)	1名 (2.0%)
	いいえ	95名 (97.9%)	46名 (97.9%)	49名 (98.0%)
塀などに落書きをしたことはありますか	はい	1名 (1.0%)	0名 (0%)	1名 (2.0%)
	いいえ	96名 (99.0%)	47名 (100%)	49名 (98.0%)
誰も住んでいない家や壊れた建物などを見つけた時、どうしますか	覗いてみたくなる	10名 (10.3%)	5名 (10.6%)	5名 (10.0%)
	そのまま通り過ぎる	87名 (89.7%)	42名 (89.4%)	45名 (90.0%)
落書きがたくさんしてある塀やトンネルなどを見つけた時、どう思いますか	楽しそうな気がする	5名 (5.2%)	4名 (8.5%)	1名 (2.0%)
	怖い気がする	44名 (45.4%)	16名 (34.0%)	28名 (56.0%)
	何も思わない	48名 (49.5%)	27名 (57.4%)	21名 (42.0%)
知らない人から声をかけられた時、どうしますか	話を聞いてみる	36名 (37.1%)	19名 (40.4%)	17名 (34.0%)
	知らんぷりする	61名 (62.9%)	28名 (59.6%)	33名 (66.0%)
盗みをしている友達を見つけた時、どうしますか **	注意する	38名 (41.3%)	28名 (63.6%)	10名 (20.8%)
	親や先生に伝える	46名 (50.0%)	12名 (27.3%)	34名 (70.8%)
	そのままにしておく	8名 (8.7%)	4名 (9.1%)	4名 (8.3%)
タバコを喫っている友達を見つけた時、どうしますか **	注意する	29名 (31.2%)	22名 (50.0%)	7名 (14.3%)
	親や先生に伝える	53名 (57.0%)	15名 (34.1%)	38名 (77.6%)
	そのままにしておく	11名 (11.8%)	7名 (15.9%)	4名 (8.2%)

**p<0.01

次に、主要項目間の関連について検討するために、項目間のクロス集計を行い、フィッシャーの正確確率検定を行った。検定の結果、有意な差が認められた項目間については、以下の通りである。

家族と防犯について話すことがあるかどうかについての項目で有意な差が認められたのは表2に示す3項目であった。家族と防犯について話をしている生徒ほど、家の外で逃げ込む場所を知っている傾向があることが明らかとなり、家族とのこのような機会の中で防犯に必要な基本事項を学んでいる様子が見え始める結果であった。また、家族と防犯について話をしていない生徒の方が、タバコを喫っている友達を見つけた時に、そのままにしておく生徒が多いことが明らかとなった。規範意識の低さと防犯意識の低さとの関連が認められる結果であり、教材開発における重要なポイントと認識できる。すなわち、防犯意識を高めることが規範意識を高め、犯罪被害を防ぐだけでなく非行予防にもつながる可能性を示唆している。落書きのある場所を危険場所と認識できるかどうかは、地域安全マップ学習に代表される「犯罪機会論」をベースとした現在の防犯教育の基本的事項である。家族と防犯について話をしている生徒に、怖いと感じる生徒が多く、話をしていない生徒に、何も感じない生徒が多いという結果は、家庭内での防犯教育の効果をそのまま表している。学校での防犯教育機会が少ない現状においては、家庭教育の占める割合が大きいため、家庭での状況がそのまま防犯教育の結果として表れているものと考えられる。家庭での教育機会が不足している生徒に対して、学校教育の中でどのように補っていくのが今後の重要な視点であることを示唆する結果である。

表2-1. 「家族と防犯について話をするか」と有意な関連項目結果

		家の外で危険を感じた時に逃げ込む場所を知っている **		タバコを喫っている友達を見つけたらどうするか **		
		はい	いいえ	注意する	親や先生に伝える	そのままにしておく
家族と防犯について話をする	はい	48名 (84.2%)	9名 (15.8%)	21名 (38.9%)	31名 (57.4%)	2名 (3.7%)
	いいえ	24名 (58.5%)	17名 (41.5%)	8名 (21.1%)	21名 (55.3%)	9名 (23.7%)

**p<0.01

表2-2. 「家族と防犯について話をするか」と有意な関連項目結果

		落書きがたくさんしてある塀やトンネルを見たらどう思う **		
		楽しそうな気がする	怖い気がする	何も思わない
家族と防犯について話をする	はい	3名 (5.5%)	32名 (58.2%)	20名 (36.4%)
	いいえ	2名 (4.9%)	11名 (26.8%)	28名 (68.3%)

**p<0.01

知らない人とメールのやり取りをしている生徒の傾向として、表3に示すように、夜8時以降に一人で外にいる生徒が多いことが明らかとなった。両項目ともに危険行動を表す項目であり、両項目に関連性が認められたことは、危険な行動を取りやすい

生徒の存在を示唆している。また、表4に示すように、家での留守番時に怖い経験をしたかどうかと誰も住んでいない家や建物を覗いてみたくなる生徒との間に有意な関連性が認められた。誰も住んでいない家や建物については、危険個所と指摘され、児童生徒が近づかない方がよい場所と教えられている。こうした場所を覗いてみたくなる生徒が留守番時に危険な経験をやる割合が高いことは、危険に近づきやすい生徒の存在を示している。表5、表6についても、同様に危険に近づきやすい生徒の存在を示唆している。知らない人からの声掛けに対して話を聞いてみると回答した生徒の方が、誰も住んでいない家や建物を覗いてみたいと回答し、タバコを喫っている友達をそのままにしておく生徒も多いことが明らかとなった。また、落書きに対して何も思わない生徒の方が、家の外で逃げ込む場所を知らない、夜8時以降に一人で外にいる、盗みやタバコを喫っている友達を見つけてもそのままにしておく傾向があることが明らかとなった。

これらの結果からは、家庭での防犯教育が成果を上げている防犯意識の高い生徒群と防犯教育が十分でなく、自ら様々な危険に近づいてしまうような危険行動群に2極化している様子がうかがえる。現実の様々な事件被害少年の様子を見聞きすると、危険行動群に当てはまるようなケースが多く、今後はこうした生徒たちに対する効果的な教育プログラムの開発が強く求められるのではないだろうか。

表3. 「知らない人とメールのやり取りをしているか」と有意な関連項目結果

		夜8時以降に一人で外にいることがある **	
		はい	いいえ
知らない人とメールのやり取りをする	はい	5名 (55.6%)	4名 (44.4%)
	いいえ	11名 (12.4%)	78名 (87.6%)

**p<0.01

表4. 「家で一人である時に誰かたずねてきて怖いと思った経験」と有意な関連項目結果

		誰も住んでいない家や壊れた建物を見つけた時 どうするか *	
		覗いてみたくなる	そのまま通り過ぎる
家で一人である時に誰かたずねてきて怖いと思った経験	ある	4名 (28.6%)	10名 (71.4%)
	ない	6名 (7.2%)	77名 (92.8%)

*p<0.05

表 5. 「知らない人に声をかけられたらどうするか」と有意な関連項目結果

		誰も住んでいない家や壊れた建物を見つけた時どうするか*		タバコを喫っている友達を見つけたらどうするか*		
		覗いてみたくなる	そのまま通り過ぎる	注意する	親や先生に伝える	そのままにしておく
知らない人に声をかけられたらどうするか	話を聞いてみる	7名 (19.4%)	29名 (80.6%)	11名 (30.6%)	17名 (47.2%)	8名 (22.2%)
	知らんぷりする	3名 (4.9%)	58名 (95.1%)	18名 (31.6%)	36名 (63.2%)	3名 (5.3%)

*p<0.05

表 6-1. 「落書きがたくさんしている塀やトンネルを見たらどう思うか」と有意な関連項目結果

		家の外で危険を感じた時に逃げ込む場所を知っているか*		夜8時以降に一人で外にいる*	
		はい	いいえ	はい	いいえ
落書きがたくさんしている塀やトンネルを見たらどう思うか	楽しそうな気がする	4名 (80.0%)	1名 (20.0%)	1名 (20.0%)	4名 (80.0%)
	怖い気がする	38名 (86.4%)	6名 (13.6%)	2名 (4.5%)	42名 (95.5%)
	何も思わない	29名 (60.4%)	19名 (39.6%)	13名 (27.1%)	35名 (72.9%)

*p<0.05

表 6-2. 「落書きがたくさんしている塀やトンネルを見たらどう思うか」と有意な関連項目結果

		盗みをしている友達を見つけたらどうするか**			タバコを喫っている友達を見つけたらどうするか**		
		注意する	親や先生に伝える	そのままにしておく	注意する	親や先生に伝える	そのままにしておく
落書きがたくさんしている塀やトンネルを見たらどう思うか	楽しそうな気がする	2名 (40.0%)	2名 (40.0%)	1名 (20.0%)	2名 (40.0%)	2名 (40.0%)	1名 (20.0%)
	怖い気がする	12名 (30.0%)	28名 (70.0%)	0名 (0%)	10名 (24.4%)	31名 (75.6%)	0名 (0%)
	何も思わない	24名 (51.1%)	16名 (34.0%)	7名 (14.9%)	17名 (36.2%)	20名 (42.6%)	10名 (21.3%)

**p<0.01

4-2 在日ブラジル人生徒の安全意識や行動傾向

表7は、在日ブラジル人中学生を対象として行った質問紙調査の結果である。

調査対象者数が少ないため、日本人との統計的に正確な比較はできないが、おおよそ次のような傾向があることは推測できる。

- ・ 家族と防犯について話す生徒が多い
- ・ 夜8時以降に一人で外にいる生徒が多い

- ・自分の携帯電話（スマートフォン）は全員が所持しており、SNS も全員が利用している
- ・知らない人と多くの人がメールのやり取りをしている
- ・防犯ブザーやホイッスルなどは所持していない
- ・留守番時に怖い経験をした生徒が多い
- ・タバコを喫ったり、酒を飲んだりする友達が周囲にいる生徒が多い
- ・落書きを怖いと思う生徒はならず、ほとんどの生徒は何も思っていない
- ・盗みやタバコを喫っている友達を見つけた時は、そのままにしておく生徒が多い

これらの結果をまとめると、在日ブラジル人生徒の生活環境下に多くの潜在的な危険が存在している様子がうかがえる。インターネットの利用に関する危険、喫煙や飲酒をする友達の存在、夜間外出、防犯グッズの不所持など、早急に対応が必要な危険が数多く存在している。そのため、外国人家庭での安全意識は高く、多くの家庭内で防犯教育を行っている。在日外国人家庭の安全意識の高さは過去の調査研究の中でも指摘されているが、この家庭内教育が現実の安全に結びついていないケースも指摘されており、教育の内容の充実が求められてきた⁴⁾。特に、日本における安全教育については、両親ともに日本語が不自由な家庭が多く、十分に情報を収集できていないのではないだろうか。落書きのある場所に関する認識の差などを見ると、ブラジル人生徒に行われている防犯教育の内容が、日本人向けに行われているものと異なっている可能性も高い。本国に帰らず定住化する生徒が増えてきている現状を考えれば、日本で通常教えられている教育内容についての理解は最低限求められるのではないだろうか。

また、平成 22 年に全国のブラジル人学校を対象に行われた調査⁵⁾では、IT に関する安全教育が不十分であることが指摘されたが、今回の調査ではスマートフォンの普及に伴い、子どもたちの IT 環境がさらに進んでいる様子が理解できた。ブラジル人生徒は、SNS の利用率が高く、知らない人とのメールのやり取りも日常的に行っている様子がうかがえ、これが様々な危険に自らを近づけている可能性は否定できない。彼らに対する IT に関する安全教育の充実は、日本人中学生以上に急務であることが指摘される結果であった。

表 7. 在日ブラジル人中学生と日本人中学生の行動や安全意識に関する全体傾向

質問項目	回答選択肢	ブラジル人	日本人
家族と防犯について話をすることがありますか	はい	9名 (75.0%)	57名 (58.2%)
	いいえ	3名 (25.0%)	41名 (41.8%)
家の外で危険を感じた時に逃げ込む場所を知っていますか	はい	8名 (66.7%)	73名 (73.7%)
	いいえ	4名 (33.3%)	26名 (26.3%)
知らない人に声をかけられて怖いと思ったことはありますか	はい	3名 (25.0%)	28名 (28.3%)
	いいえ	9名 (75.0%)	71名 (71.7%)

中学生の防犯意識や危険行動に関する現状

夜8時よりも遅くに一人で外にいることはありますか	はい	5名 (41.7%)	16名 (16.2%)
	いいえ	7名 (58.3%)	83名 (83.8%)
自分の携帯電話（スマートフォン）を持っていますか	はい	12名 (100.0%)	50名 (50.5%)
	いいえ	0名 (0%)	49名 (49.5%)
ツイッターやFacebookなどのSNSを使っていますか	はい	12名 (100.0%)	18名 (18.2%)
	いいえ	0名 (0%)	81名 (81.8%)
知らない人とメールなどのやり取りをすることはありますか	はい	8名 (66.7%)	9名 (9.2%)
	いいえ	4名 (33.3%)	89名 (89.8%)
オンラインゲームをしていますか	はい	5名 (41.7%)	50名 (51.0%)
	いいえ	7名 (58.3%)	48名 (49.0%)
防犯ブザーやホイッスルなどを持っていますか	はい	0名 (0%)	29名 (29.6%)
	いいえ	12名 (100.0%)	69名 (70.4%)
家に一人にいる時に、誰かたずねてきて怖いと思ったことはありますか	はい	4名 (33.3%)	16名 (16.2%)
	いいえ	8名 (66.7%)	83名 (83.8%)
タバコを喫ったことはありますか	はい	0名 (0%)	1名 (1.0%)
	いいえ	12名 (100.0%)	98名 (99.0%)
お酒を飲んだことはありますか	はい	2名 (16.7%)	3名 (3.1%)
	いいえ	10名 (83.3%)	94名 (96.9%)
タバコを喫ったりお酒を飲んでいる友達を見たことはありますか	はい	6名 (50.0%)	2名 (2.1%)
	いいえ	6名 (50.0%)	95名 (97.9%)
扉などに落書きをしたことはありますか	はい	0名 (0%)	1名 (1.0%)
	いいえ	12名 (100.0%)	96名 (99.0%)
誰も住んでいない家や壊れた建物などを見つけた時、どうしますか	覗いてみたくなる	0名 (0%)	10名 (10.3%)
	そのまま透りすぎる	12名 (100.0%)	87名 (89.7%)
落書きがたくさんしてある扉やトンネルなどを見つけた時、どう思いますか	楽しそうな気がする	1名 (8.3%)	5名 (5.2%)
	怖い気がする	0名 (0%)	44名 (45.4%)
	何も思わない	11名 (91.7%)	48名 (49.5%)
知らない人から声をかけられた時、どうしますか	話を聞いてみる	6名 (50.0%)	36名 (37.1%)
	知らんぷりする	6名 (50.0%)	61名 (62.9%)
盗みをしている友達を見つけた時、どうしますか	注意する	5名 (41.7%)	38名 (41.3%)
	親や先生に伝える	4名 (33.3%)	46名 (50.0%)
	そのままにしておく	3名 (25.0%)	8名 (8.7%)
タバコを喫っている友達を見つけた時、どうしますか	注意する	3名 (27.3%)	29名 (31.2%)
	親や先生に伝える	3名 (27.3%)	53名 (57.0%)
	そのままにしておく	5名 (45.5%)	11名 (11.8%)

5. まとめ

平成28年に静岡県内の公立中学校で行った調査および同県内の在日外国人学校に通うブラジル人中学生を対象に行った調査の結果、以下のような実態が明らかとなった。日本人中学生に関する主な特徴としては、「知らない人からの声掛け経験のある生徒が約3割いる」「知らない人とメール等のやり取りをしている生徒が約1割いる」「知らない人からの声掛けに対して、約4割が話を聞いてみると回答している」とい

た点が挙げられる。また、規範意識の低さと防犯意識の低さに相関関係が認められたため、防犯教育が非行予防にも効果がある可能性が示唆された。また、防犯意識が高く安全な行動を取っているグループと防犯教育が十分でなく自ら危険に近づいてしまうような危険行動を取っているグループに2極化している様子も明らかとなった。この危険行動グループは家庭での教育が十分ではないケースが多く、どこでどのような教育を行う必要があるのか、しっかりと検討することが求められる。つまり、既存の防犯教育は、一定の層には効果があるものの、効果がない層の存在が指摘された結果であり、こうした生徒に対してどのようにアプローチできるかが今後の大きな課題といえる。

ブラジル人中学生に関する主な特徴としては、「スマートフォン等の所持率が高くSNSを日常的に利用している」「多くの生徒が知らない人とメール等のやり取りを行っている」「家庭で防犯について話をする機会は多いものの、日本での基本的な防犯知識は不足している」「周囲の環境に危険因子が多く存在している」といった点が挙げられる。留守番時の危険等の直面する危険因子に加えて、インターネットの利用に伴う潜在的な危険因子の存在が指摘される結果である。またこれらの危険因子には、犯罪被害だけでなく将来的な非行につながる因子も多く注意が必要である。家庭や学校で現在行われている教育内容では不十分である可能性も指摘されるため、新たな危険に対する教育を含めた効果的な教育プログラムの検討が求められる結果であった。

これらの調査結果を反映し、在日外国人生徒向けの非行予防教育プログラムの内容として、以下の点を考慮すべきとの結論に至った。

- 危険行動を取りやすい規範意識の低いグループに対する特別なプログラムの検討
- 教育内容が届きにくいグループに対する効果的な教育方法の検討
- コミュニティサイトの利用に関する教育内容の充実
- 保護者に対する基本的防犯知識教育教材の開発

以上のような点を踏まえて、今後具体的な教材および教育プログラムの開発に取り組むことが求められる。

謝辞

本研究を行うにあたり、在日ブラジル人学校関係者に多大なるご協力を賜った。ここに記して深謝する。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C） 課題番号 26350851 研究代表者：木宮敬信）「在日外国人少年に対する段階的非行予防教育プログラムの開発」の一環として実施されたものである。

参考文献

- 1) 法務省法務総合研究所 (2015). 犯罪白書平成 27 年版
- 2) 警察庁 (2016). 平成 28 年上半期のコミュニティサイト等に起因する事犯の現状と対策について, <https://www.npa.go.jp/cyber/statics/>
- 3) 警察庁 (2016). 来日外国人犯罪の検挙状況,

https://www.npa.go.jp/sosikihanzai/kokusaisousa/kokusai/H27_rainichi.pdf

- 4) 木宮敬信 (2010). 在日外国人児童と日本人児童の安全意識の比較研究, 浜松大学研究論集, 23(1), 23-29
- 5) 木宮敬信 (2011). 在日ブラジル人児童と日本人児童の安全に関する調査研究, 日本セーフティプロモーション学会誌, 4(1), 65-72
- 6) 木宮敬信・戸田芳雄ほか (2013). ブラジルにおける防犯教育の実態について, 常葉学園大学研究紀要教育学部, 33, 91-106
- 7) 堀清和・木宮敬信ほか (2011), Grade and sex differences in safety consciousness, knowledge and behavior in primary school students, 日本健康教育学会誌, 19(4), 289-301
- 8) 島田貴仁 (2008). 子どもの犯罪被害実態と防犯対策を考える, 予防時報, 232, 8-13
- 9) ALSOK (2016). 担任の先生に聞く、小学生の防犯に関する実態調査, <https://www.alsok.co.jp/company/society/ansin/pdf/bouhan-research-01.pdf>
- 10) 内閣府 (2016), 平成 27 年度青少年のインターネット利用環境実態調査

